

本校の特徴と自分の目指す臨床検査技師像について

◎川原 梨奈¹⁾

久留米大学医学部附属臨床検査専門学校¹⁾

【はじめに】

私は現在、久留米大学医学部附属臨床検査専門学校（以下「臨検校」と称する）2年に所属しています。今回は、臨地実習の経験がない立場なりに考えたことをお伝えできたらと思います。

【臨検校での学び】

臨検校は久留米大学病院に隣接する3年制の学校です。1・2年次は講義や実習に取り組みます。学習内容の理解とレポートに追われる日々ではありますが、次第に習得した知識が繋がっていく嬉しさも感じるようになってきました。来年度に控えた臨地実習は、私が臨検校を志望した理由の1つです。いくつかの学校と比較した際に実習時間が多く、高度な技術を誇る久留米大学病院を中心に実習させていただけることに魅力を感じました。貴重な機会を無駄にしないよう、臨検校で学んだことを深めておきたいです。

【これから必要だと思うこと】

学校生活でも医療現場でもコミュニケーションを取ることが必要になってくると思います。学生の中に多くの人と関わることで新たな視点を持てたり、効率よく学べたりすると思うからです。来年度の臨地実習では、学生側から理解状況や疑問点を伝えたり、何を求められているのかを汲み取ったりすることで、お互いに有意義な時間となるのではないかと考えています。また、現在のAIや機械の導入が進む現場において、コミュニケーションという人間特有の能力は大切にすべきだと思います。よりよいデータの解釈や治療方針を決定するために、スタッフ間の情報共有や意見を述べやすい環境・信頼関係の構築が助けになると思うからです。生理検査など患者さんと接する場合には検査の目的を理解してもらったり、患者さんの様子を観察して接し方を変えたりすることで、安心して検査を任せてもらえるのではないかとと思います。

【自分の目指す将来像】

私は将来、予防医療に関わりたいと考えています。健康診断や少し違和感を覚えて受診してくれた方の小さな異変を見つけて早期治療に繋がりたいです。そして正確な検査結果を出すことはもちろんですが、医療スタッフと良好な関係を築き、患者さんの不安を軽減できるような温かみのある臨床検査技師になることが目標です。

進化する臨床検査技師

◎酒見 怜子¹⁾

美萩野臨床医学専門学校¹⁾

〈はじめに〉

私の高校合格が決まった春休みに祖母が亡くなり、その時何も出来なかったことを大変悔しく思い、将来誰かを救うことの出来る医療系の仕事に就きたいと強く思うようになりました。数ある医療職種の中から臨床検査技師を選んだ理由は、幅広い分野で医療を支える事が出来ると感じたからです。

美萩野臨床医学専門学校へ進学し、現在2学年で学内実習の真っ只中です。座学とは違い、本格的な技術や知識を多く学ぶ中で、臨床検査技師の仕事は検査結果を提供するだけでなく、チーム医療の一員として患者や他の医療スタッフにも寄り添い、病気の予防・早期発見に繋げるという重要な職種であり、またそこには進化し続ける医療に、対応し続けていく職種であるという事を実感しました。私自身、何も出来なかった自分から脱却し、「前進したい」、「進化したい」という気持ちを強く持っており、「日々進化し続ける」臨床検査技師は正に自分に適した職種であると考えます。

〈進化するために〉

日々の講義や実習を通して幅広い知識や技術を習得していかなくてはならない中で、臨床検査技師に求められているものは何かを考えるようになりました。

そこで私が特に関心を抱いたのはISO15189という臨床検査室に特化した認定精度です。

これを取得する事で検査室の役割とその信頼性の向上、共通の組織目標を掲げ、働く意欲の向上、責任の明確化、等の多くのメリットがある事を知りました。私自身、学内での実習を通して検体検査から生理検査まで全ての分野において精度管理の重要性を実感しました。ISO15189の取得は良質な検査を求められる臨床の現場には必要不可欠であると考えます。

臨床検査技師の将来的な役割 ～患者と近い存在であるために～

◎山本 咲季¹⁾

国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 医学検査学科¹⁾

私が臨床検査技師を目指したきっかけは叔母ががんで亡くなったことだ。当時、ただ漠然と医療職を目指していた私は、将来自分がどのように医療と関わりたいのかを考えるようになった。容赦なく叔母の体を蝕んでいくがんという病気と病室に足を運ぶにつれ弱っていく叔母の姿を見て、何も出来ない自分が悔しく、虚しかった。そんな中、周囲の人々の「もっと早く見つかったら」という言葉が頭から離れず、早期発見の必要性を考えていくうち、病気の発見に欠かせない医学検査という分野に興味を持つようになった。

本学では関連職種連携ワークという他の医療職を目指す学生と症例を検討する授業がある。私はこのワークを通して、臨床検査技師になるために客観的に物事を捉えることを心がけるようになった。あらゆる方向から患者に対するアプローチを考えていく中で、自職種からの観点だけで物事を捉えてはいけなと感じたためだ。他の医療従事者と連携が取れるよう、検査に関する知識だけでなく疾患や治療法についても関心を持ち、様々なことを紐づけて理解できるよう学習を継続していきたい。

臨床検査技師は今後、患者とより近い存在となるべきだと考える。臨地実習を通して、直接患者と関わることは少ないものの各検体の向こう側には患者の存在があることを身に染みて感じた。臨床検査技師は一つ一つの検体に真摯に向き合い、客観的な立場から迅速かつ正確な結果を報告することが必要である一方、技術の発展が著しい現代では、検査室から外に出て、検査の説明やベッドサイドでの検査を積極的に行うことが可能になると考える。さらに、検査に不安を抱えている患者には精神的なサポートを行うこともできる。今後、患者に対してマニュアル通りの接し方をするのではなく、一人ひとりに合わせた接し方をする必要があるのであるだろう。検査結果は様々な要因で変化するが、その結果のみでなく患者の些細な変化に気付くことができれば、早期発見の手助けになるためだ。治療前から治療後まで長期にわたって患者と関わる臨床検査技師という職業に私は大きな可能性を感じている。

私が臨床検査技師になるために取り組んでいること 凡事徹底、道具や丁寧な手技を大切にすること

◎石井 颯馬¹⁾

純真学園大学保健医療学部検査科学科¹⁾

私が臨床検査技師になるために取り組んでいることは、凡事徹底、道具を大切にすること、丁寧な手技を大切にすることである。例えば、病理検査学の実習などで、ゴム手袋などの備品がなくなったら新しいものを補充する、微生物検査学の実習など、感染性のある試料を用いる実習は、実習室の整理整頓を心がけ使用した後の方が綺麗になるようにする、といった当たり前なことを徹底的に行うことを大事にしている。また、私は、丁寧な手技が正確な検査データの提供に繋がると考えている。道具の扱い方や手技に高い意識を持って検査に向き合うことは、他の医療職からの信頼につながり、最終的には患者さんからの信頼に結びつくはずだ。

私は、医療のジェネラリストとして、検査値の解釈や意味に対して理解があり、患者さんへの接遇を大切にできる検査技師になりたい。その次のステップとして、より専門性に特化した認定技師になることが目標である。今後、AIによって検査が徐々に自動化される中でも、基礎的な技術、手技は絶対に必要である。AIを利用するにはディープラーニングによる膨大な学習が欠かせないが、その学習には検査技師の確かな技術が求められると考えられる。丁寧な手技、道具に対する姿勢は、臨床検査技師の基本を支える土台であるといえる。その先の目標としてAIを扱うことのできる検査技師になりたいと考えている。

純真学園大学は、臨床検査に対する専門知識や基本的な技術の習得だけでなく、チーム医療の一員にふさわしい知性と教養を身につけた臨床検査技師を目指している。そのため私が日々取り組んでいることをサポートし、その成果を認めてくれる大学だと思っている。私が臨床検査技師になるために取り組んでいることを評価し、目標とする検査技師に近づくための後押しをしてくださる純真学園大学で、学生生活に励んでいきたいと考えている。

私が目指す臨床検査技師像

◎深川 結妃¹⁾、外園 栄作¹⁾

九州大学大学院医学系学府保健学専攻検査技術科学分野¹⁾

[過去]

私は小学生の時の祖母の入院・手術を通して、検体や生体から目に見えない病態を数値化・画像化して考察する臨床検査技師の仕事に魅力を感じ大学へ進学しました。そして、大学の講義や実習で検査技術の基礎を学び、九州大学病院での臨地実習、卒業研究を経て、臨床検査技師国家資格を取得することができました。

[現在]

今、私は臨床化学に関する検査法をさらに学ぶために、大学院で現行の検査法を改良した新たな測定系の開発を目指し研究を行っています。実験では理想の結果が得られず悩む事もよくありますが、時には先生や友人からのアドバイスを頂きながら得られた実験結果をしっかりと整理し、問題解決に取り組んでいます。私は、研究の過程で必要な「探求心を持って物事に向かい、得られた結果に対してしっかりと考察する姿勢」は臨床検査技師にとっても非常に大切な事だと考えています。

[将来]

大学院卒業後、私は臨床の場に出て、検査におけるいろいろな経験を積むことがまずは大切であると考えています。その中で、検査技師として検体や検査法の観点から分析法や症例などについても興味を持って日々の検査に向き合っていきたいと思っています。

「探求心を持って考察する姿勢」を意識して「検体や患者さんの異常に最も早く気付ける存在」として患者さんに寄り添える技師が私の理想に掲げる臨床検査技師像です。そして、その先には、検査のプロフェッショナル、次世代のリーダーとして他の医療従事者との連携を軸にチーム医療全体に貢献できる人材を目指します。

臨床検査技師生活の第一コーナーを回って感じたこと

◎樋口 雄哉¹⁾

飯塚病院中央検査部¹⁾

私は、大学院を卒業した後に飯塚病院に入職し、現在9年目に至る。今回は、これまでの自らの経験を踏まえ”臨床検査技師になろうとしている”学生の皆さんに伝えたいこと、及び今後の臨床検査技師としての自分なりの在り方について発表したいと思う。

まず、学生の中に自分の個性をある程度認識しておくことは大事かもしれない。臨床検査技師の業務内容は非常に幅が広く、それらの検査を専門的に行うのか、全般的に行うのかは病院の規模や種類によって大きく異なるだろう。そのため、早い段階でどんな分野に興味があるのか、具体的にどういう所が好きになったのか把握しておくことは重要だろう。具体的には1,2年生の座学や実習時に好きな分野を見つけ、3,4年生の段階でその分野を突き詰める、その分野を活かせる病院を探すことが出来れば、将来のプランニングも立てやすいのではないだろうか。

興味のある分野が決定しているのであれば、認定資格を取得するのも有りだろう。私は、大学院の時に認定認知症領域検査技師の資格を取得したお陰で様々な講演をさせていただき、院内活動でも他職種の方々とコミュニケーションを取る機会をいただくことができた。昨今、AIの普及により臨床検査技師の仕事が無くなることが懸念されているが、AIを活用できる人材の育成に着目することで視点が広がると考えている。そのためには、自分自身で問題を提起し解決する力、および他職種と対等にコミュニケーションを取れるような専門的知識を有する人材が今後必要となるだろう。さらに、AIを上手に活用することで、臨床検査技師がより高度な思考や技術を有する業務に力を注ぐことも可能であろう。そう考えるとAIの普及はマイナスばかりではないのではなかろうか。

臨床検査技師を取り巻く環境はこれからも変化していくだろう。臨床検査技師として生き残っていく為に、自分自身に付加価値をつけること、および社会のニーズに応えることのできる人材となるために、情勢を掴むアンテナを張り続けたいと思う。

未来を拓く臨床検査技師像とは？

◎白波瀬 浩幸¹⁾

日本臨床衛生検査技師会 執行理事 (株式会社KBBM)¹⁾

日本臨床衛生検査技師会 (以下、日臨技) は、1952年 (昭和27年) 日本衛生検査技術者会として設立され、70年の歴史があります。その間に臨床検査技師という名称が確立され、平成27年 (2015年) には、鼻腔や咽頭ぬぐい液など検体採取の5つの行為が臨床検査技師にも行えるようになりました。平成30年 (2018年) には、「検体検査の精度の確保」のために設ける基準が明文化され、遺伝子関連検査が独立した検査分類になりました。そして、令和3年 (2021年) には医師の働き方改革を進めるためのタスク・シフト/シェアに関する改正法が施行され、臨床検査技師が行える医療行為が増えてきました。

日臨技では、臨床検査の専門性を持ち精度保障を確実にできる技師は勿論重要ですが、それだけではなく多職種と連携して活動できる臨床検査技師、病棟や在宅医療で活躍する臨床検査技師、認知症予防や不妊治療、治験業務のコーディネーションなど、企業であれ医療現場であれ、専門性だけではなく多能性があり、いろんな場面で活躍する臨床検査技師が必要とされる時代が来ていると考えています。

今回は、日臨技の方向性をご紹介するとともに、わたし自身の臨床検査技師としての歩みを紹介することで、臨床検査学生の皆さんと臨床検査技師の将来について意見交換する契機にしたいと考えています。

【わたしの職歴】

- 18歳 医療法人洛和会 丸太町病院検査課
- 19歳 医療法人洛和会 洛和会音羽病院検査課
- 25歳 同 検査課係長
- 27歳 市立舞鶴市民病院 診療技術部臨床検査科
- 29歳 同 主任
- 35歳 同 科長補佐 (臨床検査技師長)
- 44歳 医療法人洛和会 本部 経営企画部門副部長
- 45歳 京都大学医学部附属病院 検査部 (病理部門)
- 47歳 同 主任臨床検査技師
- 48歳 同 副臨床検査技師長
- 55歳 同 病理部技師長
- 60歳 株式会社KBBM バイオリソース管理部門長